

IATSS NEWS

学会通信 国際交通安全学会

- 平成27年度研究調査報告会/
学会賞贈呈式を開催
- IATSS Research Vol.39,
Issue 2発行

平成27年度研究調査報告会/ 学会賞贈呈式を開催

2016年4月8日(金)、経団連会館(東京・大手町)にて、平成27年度国際交通安全学会研究調査報告会ならびに第37回国際交通安全学会賞贈呈式を開催しました。

研究調査報告会

平成27年度に行われた研究調査の中から4テーマが報告され、約250名の参加者から高い関心と評価が寄せられました。

各テーマの概要は次の通りです。
【テーマ1】 こどもの交通モビリティと交通安全教育：適用制度の展開および拡張の可能性に着目した学際的研究

本研究は、近年の道交法の改正や、交通分野における安全、環境問題への対応、国際交通安全学会における調査研究や海外調査の経緯等を踏まえ、免許取得前の障がい児を含むこどもの交通モビリティと交通安全教育に着目し、その適用制度の展開および拡張可能性を明らかにすることを旨としたものである。

まず実態把握のために、国内のこどもの交通事故死傷者数を学齡

別にみたところ、徒歩に関しては学齡とともに減少傾向にある一方で、自転車に関しては逆に増加傾向にあることがわかった。次に、諸外国におけるこどもの交通安全教育制度について、フランスおよびオランダについて調査を実施した結果、交通安全教育機会の一部義務化およびその教育証明書制度、さらに運転免許制度との連携制度等が既に実施されており、また、障がい児に対する交通安全教育についても事例を収集することができた。

以上を踏まえ、国内において子どもを対象とした自転車交通安全教育の実施関係機関や団体にヒアリング調査を行い、国内における自転車の交通安全教育に関する現状と課題の把握を行った。また、教育内容を項目別に比較することで教育実施団体間の特徴を明らかにすることができた。

【テーマ2】 睡眠呼吸障害早期発見・早期治療の普及推進を目指した学際的研究

今年度の本プロジェクトの主な成果は、以下の通りである。



わが国の生命保険会社における治療中の睡眠時無呼吸症候群(SAS)患者の保険引き受け基準等は、SAS早期発見・早期治療に対して望ましい対応とは言い難い会社が多いことが明らかになった。

独立行政法人自動車事故対策機構(NASVA)の研修受講者、特定診断受診者において、中等度以上の重症度の睡眠呼吸障害があっても主観的眠気が強い者は少ないことを明らかにした。

某自治体男性職員において、睡眠呼吸障害の重症者ほど肥満、高血圧が多く、特に肥満者かつ睡眠呼吸障害罹患者で高血圧が多いことが示された。また、睡眠呼吸障害が重症化するにつれて客観的眠気が主観的眠気とともに高くなることが示された。

某睡眠専門医療機関において、SASに起因すると考えられた事故がSAS患者の約2割に認められた。また、複数回事故を起こしながら原因不明と本人が思っている重症潜在SAS患者が多く存在する可能性が示された。

【テーマ3】自動車の自動化運転：その許容性を巡る学際的研究

自動車の自動化運転には、人為的ミスによる交通事故の大幅削減、移動時間の多様な利用や高齢者等の移動性向上等の可能性が秘められている。この可能性は、自動車に乗車している者が、ハンドル、ブレーキ等を何ら操作する必要がない場合に、極大化する。しかし、人身事故等の危険な状況が予見される場合、人間が自動車を操作して(オーバーライド)当該危険を回避することが、現行法の下では要請される。すなわち、自動走行モードで走行中の自動車(ないしそのためのシステム)が乗員にオーバーライドを要請し、乗員が

これに応じて危険回避する態様の走行(Level 3)は許容されるが、完全な自動走行(Level 4)は違法である。

そこで、現時点では、Level 3に整理される走行を公道等で実験し、当該走行に起因する問題点(事故回避の態様、事故に係る責任帰属等)を整理しつつ、当該走行が期待される地域の実情を踏まえた交通体系の整理が望まれる。これと同時に、国際的動向を踏まえ、Level 4が許容された場合の論点(例えば、自動化運転に係る車両とその乗員を優先的に保護するため、他車に衝突し、被害を転嫁する選択が、日本の交通文化と調和するのか)の検討も、不可欠である。

【テーマ4】香川研究一事故発生要因の分析と対策への提言一

本プロジェクトの目的は、人口当たり交通事故死者数がワースト高位である香川県に実効的安全対策を提言し、かつ同策定過程を普遍化して他地域に適用することである。

信号交差点のコンパクト化前後のビデオ観測により、右左折時の速度、ショートカット、走行位置のばらつき抑制効果が検証・確認された。

運転者の安全意識に関して、免許更新時講習受講者への追加アンケートから、講習種別間差とそれらの県内地域性が確認され、各講習受講者の特徴をふまえた教育の重要性が指摘された。さらに、交差点のコンパクト化などによる運転挙動のばらつき抑制が、運転者のリスク回避・同受容行動の改善に寄与すると指摘された。

交差点間での横断中事故の約20%が、小売り施設周辺で発生していることを確認した。また、中

央分離帯開口部における散発的横断事故に対応した閉鎖措置には、実施状況にばらつきがあった。これは安全対策施工に合意形成が肝要なことを示唆している。

プローブデータにより500m四方の生活道路網毎に評価した事故リスクが、幹線道路より約2倍高いことを示し、その増大要因として新規開発地域、学校、幹線道路との交差数を特定した。

学会賞贈呈式

本年度は、業績部門において2件、著作部門において2件、そして、論文部門において1件が選ばれました。

業績部門

受賞者：ヤマト運輸株式会社、岩手県北自動車株式会社

業績題目：人流、物流、そして地域活動を効率化する協働ーヒトものバスのコンセプトと導入ー

受賞理由：ヤマト運輸株式会社と岩手県北自動車株式会社は、平成27年6月に路線バスを利用した「客貨混載輸送」を都市間バス路線の盛岡・宮古間とローカルバス路線の宮古・重茂間の2路線で開始した。

過疎地のバス事業・物流事業は運転手が不足しているとともに、過疎化・高齢化により収支も悪化し、路線網維持が難しく、物流網維持コストが増大している。宮古への都市間路線では、バス車両を大幅改造した「ヒトものバス」を使い、重茂半島へはローカル路線バスを使って荷物を運び、荷物はヤマト運輸のドライバーに引き渡している。この事業では地方バス路線の維持可能性が高まり、物流事業のサービス水準を維持する利点がある。客貨混載が持続できる

ように、車両改造・輸送ダイヤ調整を実施するとともに、地域の見守り活動の充実や特産品の物販企画に寄与していることは高く評価できるものである。

受賞者：京都市

業績題目：人と公共交通を優先した交通まちづくりへの挑戦 — 四条通道路空間再配分整備事業 —

受賞理由：当事業は、国際文化観光都市・京都市における、自動車交通に過度に依存しない公共交通優先型のまちづくりの一環として位置づけられる。平成11年の基本構想立案の後、平成18年の「歩いて楽しいまちなか戦略推進協議会」での議論から、平成22年に「歩くまち・京都」憲章を制定し、四条通整備がシンボルプロジェクトとされた。

四条通は、市中心部を東西に貫く目抜き通りで、来訪者が日常的に集中する公共交通機関の要衝として重要な役割を果たしている。四条通、川端通～烏丸通間の道路空間再配分プロジェクトは、2回の社会実験を実施し、課題検討、地元調整を図った上で平成27年10月に完了し、従前の歩行者が自由に歩けない状況が大幅に改善された。中心市街地を公共交通優先とし、人に優しい空間として車線減を伴う歩道拡幅を日本で初めて実現したことは、今後の交通まちづ

くりの嚆矢として高く評価されるものである。

著作部門

受賞者：中野宏幸（海上保安庁参事官）

著作名：交通インフラ経営のグローバル競争戦略 — 国際競争力強化に向けた国家戦略の視座 —

受賞理由：本書は、交通インフラをビジネスという観点から俯瞰し、各国がさまざまな戦略を駆使していることを示し、わが国の方向性にまで言及している。わが国の交通インフラ輸出が大きな課題になっている中で、交通インフラ経営を国際的ビジネスとしてとらえ、戦略的経営のダイナミズムを論じたことはわが国への示唆に富んでいる。多くの事例によりグローバルな視点を提供し、分析対象と問題意識は明確であり、経営学的アプローチによって網羅的に整理している点が評価される。

受賞者：赤瀬達三（株式会社黎デザイン総合計画研究所 代表取締役）

著作名：サインシステム計画学 公共空間と記号の体系

受賞理由：本書は、著者が40年以上にわたり携わった数多くのプロジェクトを通して得たサインシステムに関する経験・知見を、体系的にまとめた力作である。前半では、サインシステム黎明期の東

京オリンピックなどのサイン計画から、バリアフリーガイドライン策定に至るまでの経緯を解説しており、後半では、サインシステムの基本である、サインの要件、機能、計画プロセス、表現原則などを分かりやすく論じており、サインシステムの理論的理解と魅力的都市空間の創造に寄与するものとして評価されるものである。

論文部門

受賞者：Höskuldur R. G. Kröyer

論文名：Is 30km/h a 'safe' speed? Injury severity of pedestrians struck by a vehicle and the relation to travel speed and age (IATSS Research, Vol.39, Issue 1)

受賞理由：本論文は、既往文献のレビューと膨大なデータ分析から、事故発生時の諸条件と重症度の関連性を整理し、平均走行速度に着目した分析が行なわれていないことを述べた上で、「時速30kmは安全である」という、これまでの交通計画における通念はさほど確かなものではないと一石を投じている。興味深い分析結果を得ていることに加え、管理者視点での施策実施の効果見積りに実用的な手法を提案しており、本論文の方法論は各所に普遍的に適用でき、有用な成果をもたらすものとして評価されるものである。